

【本編】

耽溺ドールハウス／人形になりたい少女が愛玩人形になるまで／

【番外編】

アキの冷徹なる再定義

ハルの無邪気な蹂躪

双極の狂騒(3P)

【小話集】 着せ替え人形の飽くなき日常

純白の墮落(シスター編)

硝子の森の獲物(バニーガール編)

鉄の規律(メイド編)

教育の檻(スクール水着編)

朱に染まる玩具(チャイナドレス編)

終わりにき奉仕(ナース編)

???

森の奥深く霧に抱かれた御屋敷。そこは、外界の喧騒を一切遮断した、硝子とレースに囲まれた穏やかな温室のようでした。

アキ様が透き通るような白磁のカップに紅茶を注いでくれます。私は、ふかふかのソファに深々と身を沈め、自分の指先をじっと見つめていました。

「私、本当にお人形になれるのかな」

そう問いかけると、アキ様は銀縁の眼鏡の奥で、静かな、けれど深い霧のような瞳を細めて微笑みました。

「ああ、約束しよう。君はもう一步も歩かなくていい。誰かに気を遣って微笑まなくてもいい。……ただ、そこに座っているだけで愛される、至高の『モノ』にしてあげる」

私はその言葉に心から安堵しました。お嬢様として育てられ、常に「完璧な人間」であることを求められてきた私にとって、自力で呼吸することさえ、最近はいどく疲れることだった

からです。

「これ、とってもいい匂い。なんだか、お花畑にいたいみたい」

アキ様が手のひらで温めた香油を、私の手の甲にゆっくりと広げていくのを、私は不思議な気持ちで見つめていました。

「そうだろう？ 君をお人形にするための、特別な準備なんだ。……白雪、少し熱くないかな？」

アキ様の問いかけに、私はトロンとした瞳で自分の手を見つめて答えました。

「うん。……ちよつとだけ、ぽかぽかするかも。でも、嫌な感じじゃないよ。これ、もっと塗ったら、私もあのお人形さんたちみたいに綺麗になれるのかな」

私が無邪気に尋ねると、アキ様は眼鏡の奥で、吸い込まれそうなほど深い笑みを浮かべました。

「ああ、もちろんだよ。……君はあの子たちよりもずっと、僕たちの指先に馴染む、最高のお人形になるんだ」

「じゃあ、次は足の方も綺麗にしようね。白雪、ここに座って？」

弟のハル様が、私の手を取って、大きなふかふかのクッションへ導いてくれました。

私は頷いて、言われるがままにそこへ腰を下ろします。

「ねえ、ハル様。お人形さんになるのって、こんなに優しくしてもらえることだったんだね。」

私、もっと怖いことかと思ってた……」

私が素直な感想を口にする、ハル様は私の靴下を脱がせながら、クスクスと楽しそうに笑いました。

「あはは！ 白雪は本当に可愛いねえ。……うん、今はまだ『優しい』だけだよ。でも、お人形さんは、主人のやりたいことに全部付き合わなきゃいけないから……これからもっと、い

ろんなことをするよ?」

ハル様は私の足首を掴んで、その細い指先を足の裏のくぼみへと滑り込ませました。

「……っ、ふふ、……くすぐったいよ。これもお人形さんの練習?」

「そうだよ。どこを触られても、勝手に動いちゃダメ。じつとして、ボクたちの手のひらを感じるだけ。……できるかな?」

「うん。がんばるね。私、いいお人形さんになりたいから……」

私は自分の足の指の間に、とろりとした香油が塗り込まれていくのを感じながら、ぼんやりと考えていました。

足の先から伝わってくる、奇妙な熱。それは、ただのトリートメントにしては、少しだけ、私の心臓の音を速くさせるような……そんな不思議な感覚でした。

アトリエの奥にある大きなクローゼットには、お菓子細工みたいに繊細なフリルとレースがたっぷりのロリータ・ドレスが、色とりどりに並んでいました。

「君に似合うと思って、僕たちが用意しておいたんだ。……こっちの、真っ白なレースのドレスなんてどうかな？」

アキ様が選んでくれたのは、雪のように白い生地に、宝石のようなボタンがついた、お姫様みたいなドレス。

「これ、とっても可愛い……！着てもいいのかな？」

「あはっ、もちろんだよ。……白雪。お人形さんは、自分でお着替えはしないものなんだ。ボクたちが、君を一番可愛くしてあげるね♡」

ハル様が私の背後に回り、ワンピースのファスナーをゆっくりと下ろしました。ひんやりとした空気が背中に触れて、私は少しだけ肩をすくめます。

「自分でお着替えしなくていいの？　なんだか、本当にお世話されてるみたいで、ちょっと照れちゃう」

「いいんだよ。されるがままに、じっとしていること。それが、お人形さんの最初のステップだからね」

アキ様とハル様の手によって、私はゆっくりと「人間のお洋服」を脱がされ、真っ白な、ふわりとしたドレスへと着替えさせられていました。パニエが何層も重なって、私の身体を優しく、重たく包み込みます。

「……えへへ。重たくて、なんだか動くのが大変かも……。でも、お姫様になったみたいで嬉しいな」

私が鏡の前でぎこちなく一回転しようとする、アキ様がそっと私の腰を支えて、動きを止めました。

「そうだね、白雪。お人形さんは、そんなに自分から動かなくていいんだ。君はこうして決めた場所で、重たいドレスの重みを感じながら、じっと座っていればいい」

「ありがとう。私、このお洋服を着ている間は、ずっといい子で座ってるね」

私は幾重にも重なったレースに埋もれるようにして、椅子に腰を下ろしました。パニエのボリュームのせいで、脚を閉じるのが少し難しくて、自然と膝がゆるやかに開いてしまいます。

「あはは！ ドレスが重たくて脚が閉じられないみたいだよ。……いいよ、そのまま。お人形さんの脚は、それくらい無防備な方が可愛いんだから……♡」

ハル様が私の膝の上に手を置き、ドレスの裾を少しだけ整えるふりをして、太ももの奥の方へと指を滑り込ませました。

「……っ、ふふ。くすぐったいよ。……お洋服のシワ、ちゃんと伸びたかな？」

「うん、バッチリだよ。……さあ、そのまま動かないで。……世界で一番可愛いお人形の、お

披露目だ」

私は大好きなお洋服に包まれている多幸福感の中で、自分がどんどん「動けないモノ」として完成していくことに、心地よさすら感じ始めていました。

「……うん。いい具合に力が抜けてきたね。……次は、白雪。お人形として一番大切な『関節の可動チェック』をしようか」

「関節の……チェック？ なんだか難しそう。私、ちゃんとできるかな」

アキ様は私の不安を打ち消すように、優しく私の膝の裏に手を差し入れました。

「大丈夫だよ。君はただ、僕に身体を預けていればいい。お人形さんは、主人の好みに合わせて、どんな無理な姿勢でも、そのままの形で固定されなきゃいけないんだ」

アキ様はそう言って、私の右脚をゆっくりと、胸の方まで押し上げました。真っ白なワンピースの裾が、重力に従って無残に捲れ上がっていきます。

「……あ。……アキ様、これ、ちょっと恥ずかしいポーズだよ……？ お洋服が、捲れちゃってる……」

私は顔を赤くして、思わず裾を押さえようと思いました。でも、アキ様は私の手首をそっと掴んで、それをクッションの上に固定したんです。

「だめだよ、白雪。お人形さんは、自分の格好を恥ずかしがったりしないんだ。……見てごらん。こうして脚を大きく広げて、自分の『中身』まで主人に見せること。……これも、お人形さんの大切なポーズなんだよ」

アキ様は、私の両脚をMの字を描くように左右に大きく開かせました。お嬢様として育てられた私にとって、人前でこんなに無防備な姿を晒すなんて、本来なら考えられないことです。でも、アキ様の声があまりに静かで真剣だから、「あ、これもお勉強なんだ」って、すっと納得してしまいました。

「そうなの？ お人形さんって、こんなに……脚を開いたままでいなきゃいけないんだね」

「あはは！ 白雪、お股のところがピクピクしてるよ？ 恥ずかしいのかなあ」

ハル様が横から覗き込んできて、私の内腿の柔らかいところを、指先で「ツン」と突つきました。

「……あ、ハル様、そこ……なんだか、変な……変な力が、入っちゃうよ……っ」

「いいよ、そのまま。……お人形さんは、触られても逃げちゃだめ。……アキ、この角度で固定していい？ ボク、このポーズの白雪、すごく好きだな」

アキ様は私の脚の付け根に、さらにぐっと力を込めました。関節が限界まで広げられ、自分の一番恥ずかしい場所が、二人の愛好家の目に完全に晒されてしまいます。

「……うん。この可動域なら問題ない。……白雪、いい子だね。このまま、しばらく動かないで。お人形さんは、主人が『いいよ』って言うまで、このままの形で、ずっと待っているもの

なんだよ」

私は、二人の熱い視線が自分の秘部に注がれているを感じながら、必死に「お人形さん」になろうと、脚を広げたまま固まりました。

「次はお顔も整えないといけないね。お人形さんは、唇もいつだって艶やかで、美しくなきゃいけないから」

私はアキ様の前にトコトコと歩み寄って、お化粧をしてもらいやすいように、少しでも顔を上向きにしました。アキ様は私の顎を細い指先でそっと支えて、小さな瓶から銀色の匙で、とろりとした桃色のグロスを掬い上げました。

「これはね、ただのリップじゃないんだ。……お人形さんの声を、一番綺麗な『吐息』だけにするための、魔法の蜜だよ」

アキ様はそう言って、私の唇にゆっくりと、その温かい蜜を塗り広げていきました。

「……………あ、……………甘い。これ、お菓子みたいな味がする」

私はペロリと舌尖で唇を舐めました。蜂蜜よりもっと濃厚で、鼻の奥に抜けるような、陶酔を誘う甘い香り。でも、それを塗り終わった瞬間、なんだか急に、頭の中がぼーっとしてきて……………。

「あはっ！見てよ、白雪、もうお目目がとろんとしてきた。……………ねえ、白雪。ボクの名前、呼んでみて？」

ハル様が横から悪戯っぽく、私の耳元で囁きました。私は「ハル様」って呼ぼうとしたんです。でも、唇が……………自分のものじゃないみたいに、重たくて、柔らかくて。

「あ、……………あ……………う。……………ん……………」

「……………おや。言葉が上手く出ないかな？……………いいんだよ、白雪。お人形さんは、難しい言葉

なんて喋らなくていい。……こうして、私たちが触れるたびに、甘い吐息を漏らすだけでね」
アキ様が私の下唇を親指で「ぐっ」と押し下げると、私の口は力なく、ぽかんと開いたままになっ
てしまいました。

喋ろうとすればするほど、脳みそがとろとろに溶けていくような感覚。

「ハル様」と言いたいの、喉からは「あ、はぁ……っ」という、熱っぽい吐息しか出てき
ません。

「……ふふ、とっても可愛いよ、白雪。……お人形さんは、自分の意思で何かを伝える必要は
ないんだ。……これからは、僕たちが君の声を『解釈』してあげるからね」

アキ様が私の口内に指を滑り込ませ、甘い蜜を口の隅々まで塗り広げます。

私は、ドレスの重みと、唇から広がる痺れるような甘さに支配されて、ただ「あ、……あう
……」と、意味のない声を漏らすだけの、幸せな「モノ」になっていくのを……ただ、ぼんや

りと受け入れていました。

言葉を奪われ、甘い吐息を漏らすことしかできなくなった私を、アキ様はひょいと抱き上げ、自分の膝の上に横向きに座らせます。パニエがたつぷり入った真っ白なジャンパースカートが、アキ様の膝の上で大きく膨らんで、私の視界を白いレースの波で埋め尽くしました。

「……白雪。お人形さんはね、外側が綺麗なだけじゃダメなんだ。……ナカも、いつも清潔で、空っぽにしておかないといけないんだよ」

アキ様はそう言って、私のドレスの裾をゆっくり捲り上げました。幾重にも重なったフリルが持ち上がり、お気に入りのリボンがついたドロワーズの奥が、アキ様の視線に晒されます。

私は伝えられない言葉を、熱っぽい溜息にして漏らしました。でも、アキ様は私の内腿に触れた瞬間、眼鏡の奥の瞳をずっと細めたんです。

「……おや。困ったね、白雪。……見てごらん、君の大事なところが、こんなに熱くなって

……蜜が漏れ出しているよ」

アキ様が、ドロワーズのクロッチの部分を指先でなぞりました。そこには、自分でも気づかないうちに、トリートメントの熱に浮かされた私のナカから溢れた蜜が、じつとりと染みを作っていたんです。私は不安になって、アキ様のシャツの胸元をぎゅっと掴みました。

そんな私の無垢な反応を見て、ハル様が横からクスクスと笑いながら、私の耳元に唇を寄せました。

「あはは！ 本当だ、白雪、お人形さんなのに自分じゃ止められないくらい壊れちゃってるね。

……アキ、早く『お掃除』してあげて？ このままじゃ、可愛いドレスまで汚れちゃうよ♡」

「……そうだね。……白雪、動いちゃダメだよ。『中身』を全部綺麗にして、君を本物の空っぽなお人形にしてあげるからね」

アキ様は、濡れたドロワーズを「ずいっ」と横にずらし、私の剥き出しになった秘部へ、白

い手袋を外したばかりの素肌の指先を押し当てました。

「……ひっ！……あ、はあっ、んんうう……っ」

初めて触れられる、一番恥ずかしい場所。

アキ様の指が、熱を持った私の「ひだ」を割り、ぬるりとナカへ滑り込んだ瞬間、私の脳内は真っ白な火花が散ったみたいになりました。

「……んんーっ！ん、んうう……っ！！♡」

「ふふ、指一本入れただけで、こんなに震えて。……お掃除のしがいがある器だ。……さあ、白雪。君のナカに溜まった『いけないもの』を、全部僕の指で、掻き出してあげよう……」

アキ様の指が、ナカの柔らかな壁を抉るたびに、私はドレスの裾を握りしめたまま、仰け反りました。

それが「快感」なんて破廉恥なものだとは知らない私は、ただ、アキ様に壊れたところを直

してもらっているんだと信じて、もっと、もっと奥まで「お掃除」してほしいと、言葉にならない声で鳴き続けていました。

中
略

アキ様の突っ込みが、少しずつ、深く、鋭くなっていく。真っ白なパニエが激しく擦れ合う音を立て始めました。さっき流れた私の血が、アキ様の動きでかき回されて、ナカが「じゅり、じゅぷり」と、はしたない音をアトリエに響かせます。

「……あ、……あ、あ、……あああ♡♡」

アキさま、……すごい、……すごい、……こ、これ……っ！！♡

「お人形さんは、こうして激しく揺さぶられて、中身をぐちゃぐちゃにされるのが一番の幸せなんだ。……ほら、もっと奥まで……僕の『熱』を受け入れて」

アキ様の動きは、もう止まりません。優しかったピストンは、今や私の身体を壊すような勢いで、何度も、何度も、最奥の聖域を叩きつけます。

そのたびに、私の頭は後ろにのけ反り、ドレスのフリルが波打つように踊りました。

「あはは！ 見てよ、白雪の身体がアキの突き上げでこんなに弾んでる！！ お人形さんなのに、

お顔も、お胸も、全部ボクたちの思うがままに揺らされて……最高に可愛いよお!!」

ハル様が私の腰を上から押さえつけ、アキ様の衝撃を逃がさないように固定しました。

逃げ場のない快感。ナカのお口を無理やりこじ開けられ、アキ様の大きな熱が、私の魂を削り取っていくような感覚。

「……あ、……あああ!!♡♡」

私は、自分の声が、甘い蜜に溶けていくのを感じていました。

激しく、もっと激しく。アキ様のピストンが速くなるたびに、私は自分の意思を失い、ただ欲望をぶつけられるだけの幸せな人形へと堕ちていきます。

アキ様のピストンが、もう目にも止まらない速さで私の最奥を叩いています。ドレスのフリルは無残に乱れ、私の身体はアキ様の突き上げに合わせて、壊れた操り人形みたいにガクガクと跳ね続けました。

頭の中は、もう真っ白。自分が誰なのかも、ここがどこなのかも分からなくて、ただ、お腹の底から突き上げてくる「なにか」に、全身が支配されていました。

「……白雪、いいかい。……今から、君の中に、僕の全部を注ぎ込む。……これが、お人形としての……最後の『仕上げ』だ……!」

アキ様が、私の腰を碎けるほど強く掴んで、最後の一突きを深く、深く……私の魂の奥まで届くように叩き込みました。

「……あ、……あああああーっ!!っ!!♡」

その瞬間、私のナカで、熱い、熱い「魔法の液」が、滝のように溢れ出しました。

それは、さっきまでのどんな刺激よりも熱くて、濃密で……。私の空っぽなナカを、アキ様の「独占の証」が、隅々まで満たしていくのが分かりました。

あつい、……あついよお……っ。……わたしのなか、……アキさまで、いっぱいになっ

「見てよアキ！白雪のお腹、ボクたちのせいでこんなにボコボコしてる！！」

「……ああ、本当に。人間の皮膚というものは、これほどまでに伸縮し、僕たちの形を受け入れることができるのか。……素晴らしいよ、白雪」

アキは白雪の背中を愛おしそうに撫で、ハルは彼女の首筋に歯を立てる。

白雪はもはや、自分が何人なのか、どこの穴を誰に犯されているのかも分からなかった。ただ、全身が二人の主人の「熱」と「質量」に支配され、内側から作り替えられていく万能感に、涙を流して絶頂し続けた。

快楽の波は、終わることなく押し寄せる。アキが腰を引けば、ハルが深く突き入れる。ハルが揺さぶれば、アキが急所を穿つ。

呼吸を合わせる必要すらなかった。二人の愛好家は、白雪という「素材」を通じて、阿吽の呼吸で彼女を「極限」へと追い詰めていく。

「……さあ、白雪。お人形としての仕上げの時間だ」

アキの声が熱を帯び、ピストンの速度が極限に達する。

「あはっ！ ボクも、ボクももう限界！！ 白雪、全部、ゼーんぶ飲み込んでねえ！！」

小話集 着せ替え人形の飽くなき日常

アトリエの片隅には、巨大なウオークインクローゼットがある。そこには、世界中の贅を尽くした衣装から、およそ人間が着るものとは思えない倒錯的な拘束具まで、白雪を着飾るための「外装」がひしめき合っている。白雪は今、ただの肉体ではない。その衣装に命を吹き込み、主人の欲望を反射させるための「生きたマネキン」なのだ。

【朱に染まる玩具（チャイナドレス編）】

「今日はこれだよ！横がぱっくり開いてて、白雪の綺麗な脚が全部見えちゃうやつ！」

ハルが持ってきたのは、深紅のシルクに金の刺繍が施されたチャイナドレス。だが、ハルが特注したのは、腰のかなり高い位置までスリットが入った、下着の着用を一切想定していない

「観賞用」のドレスだった。

……これ、……動くたびに、……ナカが……。

「見せていいんだよ！だって、そこにはボクがつけた『飾り』がついてるんだもん！」

ハルは、白雪のナカに、大きな鈴のついたクリスタル・プラグを挿入した。ドレスのスリットから覗く、白雪の白い太ももと、その奥で揺れる銀色の鈴。

主人の前で三指をつき、お辞儀をするたびに、「チリン、チリン」と、彼女が凌辱されている証拠が音を立てて鳴り響く。

「いい音だねえ。ほら、ボクの周りを歩いてみて？ 鈴を鳴らさないように歩けたら、ご褒美をあげる。……鳴らしちゃったら、そのたびにボクが中をかき回してあげるからね！」

白雪は、必死にナカを締め、音を立てないように歩こうとするが、一步踏み出すたびに鈴は無情に鳴り、そのたびにハルの強烈な「お掃除棒」が、ドレスを捲り上げた隙間から突き刺さる。赤いドレスは次第に白雪の蜜で濡れ、彼女は「チリン、チリン」という音を聞くたびに、反射的に絶頂してしまう、忠実な「鳴き人形」へと作り替えられた。